

4971 **メック**

前田 和夫 (マエダ カズオ)

メック株式会社社長

グローバルニッチトップとして、進歩を続ける技術革新を支えていく

◆2018年12月期第2四半期のトピックス

2017年より事業年度の末日を翌年3月31日から同年12月31日に変更した。したがって、当第2四半期の業績は、2017年1月から6月の組みかえ数値を「前年同一期間」として比較している。

為替については、台湾ドルが想定レート3.70円に対して実勢レート3.67円(前年3.66円)、人民元は17.00円に対して17.04円(前年16.41円)とほぼ想定どおりであった。前年比で円安となり、為替の影響は売上高で前年同一期間比77百万円増、営業利益は同37百万円増となった。薬品の売上高は同11.8%増、出荷量同11.3%増となった。

当第2四半期の業績は、売上高54億99百万円(同10.9%増)となった。第1四半期に比べると、スマートフォン関係の売上が若干伸びた。営業利益は10億39百万円(同13.8%増)となったが、粗利が64.2%から63.5%に若干落ち、一時的な販管費の支出もあった。経常利益は10億42百万円(同14.5%増)となった。純利益の8億89百万円(同33.6%増)は、台湾の税制改正による一時的な還付金があったことで大幅に増加した。

薬品売上高は53億86百万円で、全売上高に占める割合は97.9%(同0.7ポイント増)である。海外売上高比率は55.0%(同0.7ポイント減)と微減だが、国内代理店渡して、実質的に海外に出ていく分を足すと74.3%である。

◆2018年12月期第2四半期決算と通期予想

常務執行役員管理本部長 北村 伸二

当第2四半期を公表計画と比較すると、売上高は54億99百万円(計画比1百万円減)となり、ほぼ計画を達成した。内訳は薬品53億86百万円、機械27百万円、資材67百万円である。営業利益は10億39百万円(計画比1億39百万円増)、経常利益は10億42百万円(計画比92百万円増)、親会社株主に帰属する四半期純利益は8億89百万円(計画比1億89百万円増)となった。

連結貸借対照表の資産合計は189億39百万円(前期末比3億8百万円減)である。減少要因は、主要顧客の入金額が減少したこと、現金および預金への振替により受取手形および売掛金が3億74百万円減少したことである。さらに、投資有価証券の時価下落分が40百万円となった。

負債合計は39億79百万円(同6億80百万円減)となった。これは流動負債の1年内返済予定の長期借入金および固定負債の長期借入金で2億50百万円減少したことが大きい。

純資産合計は149億59百万円(同3億72百万円増)で、自己資本率79%となった。

連結キャッシュフローは、営業活動によるキャッシュフローがプラス12億30百万円、投資活動によるキャッシュフローがマイナス7億29百万円、財務活動によるキャッシュフローがマイナス4億81百万円となり、その結果、現金および現金同等物期首残高36億64百万円に対して、同期末残高36億20百万円となり、44百万円減少した。

品種別四半期推移では、薬品売上高が伸び、機械は減少、資材とその他が伸びた。構成比は薬品 97.9%、機械 0.5%、資材 1.2%、その他 0.3%である。薬品の内訳は、銅表面処理剤が大半を占める中、売上も伸びている。それに対して、防錆剤、フラックス剤、剥離剤、その他の売上は減少している。その中でも、エッチング剤、密着向上剤は増加し、その他表面処理剤は減少している。しかし、出荷数量はその他表面処理剤も含めて、いずれも伸長している。

当社の主力製品である CZ-8101 は売上が好調である。

地域セグメント別売上高推移と海外比率は、日本、アジア、欧州ともに好調だった。

2018年12月期通期連結業績予想は、売上高 116 億円、営業利益 23 億円、経常利益 24 億円、当期純利益 17 億 50 百万円である。

現在、尼崎工場のユーザー認定取得のために西宮工場と並行稼働しており、原材料価格の上昇、運送費や人件費の上昇により増収減益を見込んでいる。

◆今後の事業展開

社長 前田 和夫

当第 2 四半期の人材確保は計画どおりに進み、それに伴って人件費は上昇した。また、当社の原材料は石油由来ではないため、原油価格のインパクトは少ない。

通期予想については、当社の繁忙期は下期であるため、上期は若干上振れしたが、不確定な外的要因もあり、通期連結予想は据え置いている。

今年上期の市場の動向については、スマートフォン、タブレット PC が若干弱く、自動車、インターネット通信インフラが強い傾向があった。

当社のコア技術である密着向上技術、微細配線形成技術、表面処理技術は、今後の技術革新に必要とされるため、研究開発を進めながら事業展開をしている。

5G、AI、IoT、自動運転車等は、当社も陰ながら推し進めている領域である。信頼性、スピード、微細化が要求されるため、当社の薬品プロセスが使われるようになる。

尼崎事業所には、研究所、工場、メーカー、事務部門を集め、先端技術の研究開発をしている。ディスプレイ関連、構造体、その他樹脂金属接合関連分野を伸ばし、さらに、要素技術の開発なども進めていきたい。

当社の経営基盤は、E(環境)、S(社会)、G(ガバナンス)に H(人財の育成)を加えた ESG+H 経営の実践である。

電子基板業界の中では当社の薬品プロセスは環境負荷が比較的 low、従来のプロセスから置き換えてもらうことで現場環境が改善し、歩留まり率や生産性の向上により顧客の無駄な投資を減らすことができる。

社会に対しては、5G や自動運転などの技術による社会貢献を進めていく。また、当社の女性登用については、取締役・執行役員の経営幹部計 13 名のうち 4 名(約 31%)が女性である。機会均等に配慮しながら、ワークライフバランスに全社で取り組む。

ガバナンスについては、当社は独立社外取締役 3 名を監査等委員とする監査等委員会設置会社である。さらに、取締役会への推薦、提言を行う直属の委員会として、指名報酬諮問委員会(独立社外委員過半数)、ESG 委員会(独立社外委員過半数)を設置している。

経営戦略、事業成長戦略、技術マーケティングを徹底的に強化し、オープンイノベーションにも努めている。

◆質 疑 応 答◆

当第2四半期の一過性の販管費の規模が知りたい。

50百万円程度である。

当第2四半期のスマートフォンの動向はどのように影響したか。

わずかであるが、新機種が動き出した。ディスプレイ関連でエッチング剤や密着向上剤で少し恩恵を受けた。

尼崎工場と西宮工場の並行操業によりコストアップになるが、今後の計画が知りたい。

2016年10月に尼崎工場が竣工したが、落ち着くまでにあと3年ぐらいは並走操業していき、その後は西宮工場を閉鎖する予定である。

CZシリーズの次なる主力商品は何か。

圧延銅粗化処理剤(UTシリーズ)である。今後フレキシブル基板や一般的な高密度なリジット基板に関しても細かく粗化ができるため、伸びることを期待している。

スーパーコンピューターなどに限られて使われているフラット処理用の薬品も徐々に増えると考えている。

(2018年8月10日・東京)

* 当日の説明会資料は以下のHPアドレスから見るができます。

<http://www.mec-co.com/ir/library/>